

「常に誤る」と「時々誤る」

——デカルト的行論の一考察——

武藤 整司

I 問題の所在

デカルトは「第一省察」の懷疑の過程で、「私は常に誤る(*semper fallar*)」と「私は時々誤る(*interdum fallar*)」とを、対句的に用いている(VII.21)。これらの言葉は、そもそも日常語であるし、付与されている意味も、見掛け上は平凡そのものである。異彩を放つ哲学用語でもなければ、何か特異な状況を表現している文言でもない。したがって、つい見過ごされてしまうような一節である。しかし、「時々誤る」はともかくとして、「常に誤る」とは、一体どういう事態なのか。

われわれは、たとえ枯尾花を幽霊と見間違えることはあつても、よくよく見れば幽霊ではなく枯れた芒であることが分かる。もし、瞞めている対象がどこまでも幽霊にしか見えなかったならば、それは枯尾花ではなく、その正体は何であれ、もはや幽霊そのものと言つてよいだろう。つまり、枯尾花を幽霊と見間違えたことが分かるのはよくよく見直した後のことであつて、見直しても対象に変わりがなければ、あるものを自分が何かと見間違えたことすら分からない筈である。したがって、「常に誤る」という事態は、奇妙な様相を呈していることが分かる。

もつとも、往々にして人は、自分のことに限つて気付か

ないことが多く、何ごとかをなすたびに誤つてしまうことは、十分にあり得ることである。しかも、自ら誤りに気が付くことは稀で、傍らでその人の行動を観察していた者の方が、そのような誤りに気付き易い。「傍目八目」という俚諺があるが、まさにそのような事態を表現している。つまり、囲碁を打つ者が、ある同一の局面で定石を思い出せずに、「常に誤る」ことはあり得ることなのである。したがって、たしかにこの観点からは、「常に誤る」ということも何ら不思議な現象ではない。

ところが、デカルトが挙げている事例は、そのような日常的な間違いではなく、「2に3を足せば5になる」とか「四角形は四つの辺をもつ」とかいった、初等数学のそのまた初歩に属する事柄である。「2に3を足せば5になる」など、児童でも知っていることである。したがって、これらにおいて「常に誤る」という可能性があるとすれば、われわれの常識を根底から脅かすことになるだろうし、多忙な人ならば、そのような想定をなす者を相手にしないだろう。それにもかかわらず、デカルトは、われわれが「時々誤る」ことを神が許しているならば、「常に誤る」ことも

十分にあり得ることである、と主張する。これは強弁あるいは詭弁の類であつて、まともな行論とは言えないのではないか。

このように、デカルトが持ち出した「常に誤る」という事態は、やはり奇妙な想定であることを免れない。「誇張的懷疑(hyperbolicæ dubitationes)」と自ら呼ぶ(VII:89)所以でもある。しかし、なぜデカルトは、通常ならば誰も耳を貸すことのないような想定をなしたのか。一連の緻密な流れは、この箇所で乱脈の様相を呈しているのか。それとも、不可欠の要素を秘めているのか……。ここで、驚直に小論の立場を示すことにしよう。すなわち、われわれは、この想定を、気軽には省くことができない重要な行論と看做したいのである。

以上のことから、小論の目的は、「常に誤る」という事態を、デカルトの文脈において吟味し、その意義を明らかにすることである。その際、相似た一節におけるいくつかの翻訳に現れた読み方の違いを、指摘かつ検討することから始め(Ⅱ節)、次いで、「常に誤る」と「時々誤る」との相違を、とくに「常に」という副詞の特異性を中心に考察

し「Ⅲ節」、最後に、それを承けて、デカルトが懐疑の渾に陥った「底知れぬ渦(Profundus gurgis)(VII-24)」の中が、かえってデカルトが求めていた地点であったことを示している(Ⅳ節)。

Ⅱ 「時々判断する」のか「時々間違える」のか

(a) 新旧の仏訳における相違

デカルトの『省察』本文の最初の仏訳はリュイヌ公によつてなされている(一六四七年に第一版が出ている)。この仏訳本は、デカルト自身によつて校閲されたと伝えられており、その点で信頼性の高いものと考えられてきた^(註)。したがつて、この仏訳は、十七世紀の古めかしい文体であるにもかかわらず、今世紀に至るまで読み継がれてきたが、最近になって新しい仏訳が出版された。その新訳と旧訳とを比較してみると、やはり旧訳に問題がないとは言えないのである。新訳の訳者であるミッシェル・ベサードも、旧訳(リュイヌ公の訳)が「不可侵(intangible)」であ

ると述べながら、同時に「ある種の曖昧さ(une certaine ambiguïté)」を含んでいる、と述べている^(註)。事実、新訳には、明らかに旧訳とは原文の読み方が異なる箇所がある。われわれが取り上げる箇所は一箇所であるが、そこでは、時に関する副詞がどちらの動詞を修飾しているかによつて、意味が大きく異なるのである。したがつて、その他の各種の訳(独訳、英訳、邦訳)を参照しながら、新旧の両仏訳を比較検討し、デカルトの原文における意図をできる限り読み取つてみたい。

原文を引用しよう。尚、この段階では敢えて邦訳を与えないでおく。

《Imo etiam, quemadmodum iudico interdum alios errare circa ea que se perfectissime scire arbitrantur, ita ego ut fallar quoties duo & tria simul addo, vel numero quadrati latera, vel si quid aliud facilius fingi potest?》(VII-21)

問題の副詞は上の引用文でイタリック体によつて示した《interdum》である。この語句が果たして直前の動詞

《judico》を修飾しているのか、それとも次に続く《alios errare》を修飾しているのか。部分に絞って、原文および各訳を列挙してみよう。尚、当該副詞の訳のイタリックおよび傍点は、論者が施したものである。

○ 羅語 (Descartes の原文)

《~, quemadmodum judico interdum alios errare circa ea quæ se perfectissime scire arbitratur, ~》(*ibid.*)

○ 仏訳① (Duc de Luyne の訳)

《~, comme je juge *quelquefois* que les autres se méprennent, même dans les choses qu'ils pensent savoir avec le plus de certitude, ~》(IX-1-16)

○ 仏訳② (M. Beyssade の訳)

《~, de même que je juge que d'autres *quelquefois* s'égarent dans ce dont ils estiment avoir la science la plus parfaite, ~》⁽¹⁾

○ 独訳① (A. Buchenau の訳)

《~, daß — so wie ich urteile, daß *bisweilen* auch andere sich in dem irren, was sie aufs vollkommenste zu wissen meinen —》⁽²⁾

○ 独訳② (L. Gäbe の訳)

《~, so wie ich überzeuge bin, daß andere sich *bisweilen* in dem irren, was sie vollkommen zu wissen meinen, ~》⁽³⁾

○ 英訳① (E. S. Haldane and G. R. T. Ross の訳)

《~, as I *sometimes* imagine that others deceive themselves in the things which they think they know best, ~》⁽⁴⁾

○ 英訳② (J. Cottingham の訳 [(1)])

《~, since I *sometimes* believe that others go astray in cases where they think they have the most perfect knowledge, ~》⁽¹⁾

○英訳③ (J. Cottingham の訳 [2])

「~, since I sometimes consider that others go astray in cases where they think they have the most perfect knowledge.」⁽¹¹⁾

○英訳④ (G. Heffernan の訳)

「— just as I sometimes judge that other people err about the things that they think that they know perfectly.」⁽¹²⁾

○邦訳① (三木清の訳)

「私はときどき他の人々が自分では極めて完全に知つてゐると思つてゐることに關して間違ひをしてゐると判断するのであるが、」⁽¹³⁾

○邦訳② (井上庄七・森啓の訳)

「私は、他の人々が、自分ではきわめて完全に知つてゐるつもりの事がらにおいてまちがっている、と思

うことがときどきあるが、」⁽¹⁴⁾

○邦訳③ (榎田啓三郎の訳)

「他の人々が自分ではきわめて完全に知つてゐるつもりでゐることがらについて間違つてゐると私が判断することが時おりあるように、」⁽¹⁵⁾

○邦訳④ (所雄章の訳 [1])

「私は時々折は他の人々が自分ではいとも完全に知つてゐると思ひなしてゐるところに關して「さえ」過つてゐると判断することがあるが、」⁽¹⁶⁾

○邦訳⑤ (所雄章の訳 [2])

「私は時々折、他の人びとが自分ではいとも完全に知つてゐると思ひなしてゐるところに關して「すら」過つてゐる、と判断することがあるが、」⁽¹⁷⁾

先ず、両仏訳を比べてみれば一目瞭然であるが、旧訳は、《interdum》が修飾している動詞を《iudico》と看做し

ているのに対して、新訳では、《alios errare》を採っている。また、独訳はいずれも《alios errare》を採り、それとは対照的に、英訳では挙げた訳のすべてが《iudico》を採り採っている。尚、《interdum》の訳は、それぞれの言語で同じ単語が使用されおり、その点では問題はない。さらに、邦訳とは言え、やや曖昧な趣を呈している訳もないわけではない。というのも、欧米語が接続詞を境にして副詞の位置がはつきりとしているのに対して、日本語は言語構造が異なるために、邦訳①と邦訳④は、無理をして読めばベサード訳に通じないこともないからである。しかし、おおむねリユイヌ公の訳に沿っていると考えて差し支えないだろう。したがって、提示した十三の翻訳のうち、三つを除いて、「時々間違える」ではなく「時々判断する」と読んでいることが分かる。

さて、ここで論者の考えを示さなければならないだろう。結論から言えば、ベサードの新仏訳および両独訳に従いたい。すなわち、《interdum》は、《alios errare》を修飾している、と読みたい。根拠を挙げていこう。

(b) 「時々間違える」を採る二つの根拠

第一に、もし、《iudico interdum》と読むことに無理があるとすれば、必然的に《interdum alios errare》と読まなければならないことになるだろう。反対に、《interdum alios errare》と読むことが自然ならば、当然のごとく《iudico interdum》と読むことができなくなる。結論から言えば、デカルトの用いるラテン語の文体や用例から推測して、《iudico interdum》とは読めない。根拠を挙げてみよう。

『省察』本文の中に現れる《interdum》の位置を調べてみると分かることだが、あらゆる場合で、《interdum》はその修飾する動詞の前に位置している。用例は九つあるが、煩を厭わず列挙してみよう。尚、ここでは文体のみを問題にしているので、各文の訳は一部を除いて省く。

① 《...hos autem interdum fallere deprehendi...》(VII-

- ② 《-, quamvis interdum sensus circa minuta quaedam & remotiora nos fallant, -》 (*ibid.*)
- ③ 《- pati, vel etiam interdum minus verisimilia, -》 (VII-19)
- ④ 《-, quemadmodum iudico interdum alios errare circa ea quæ se perfectissime scire arbitrantur, -》 (VII-21)
- ⑤ 《-, ab eadem etiam videretur esse alienum permittere ut interdum fallat, -》 (*ibid.*)
- ⑥ 《-, quia nempe corpora triangularem figuram habentia interdum vidi, -》 (VII-64)
- ⑦ 《-, ut interdum in iis fallat quæ me puto quàm evidentissime percipere, -》 (VII-70)
- ⑧ 《-, nam & interdum - videbantur, -》 (VII-76)
- ⑨ 《-, se sibi videri adhuc interdum dolorem sentire in eâ parte corporis quâ carebant, -》 (VII-77)

上から、①、②、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨の《interdum》は、明らかに、後ろの動詞（不定詞を含む）を修飾していることが分かる。③の《interdum》は、たまたま動詞が前に来

ているように見えるが、付加的に添えられた文章なので、動詞の繰り返しを避けるため、おそらく、《verisimilia》の後ろに来る筈の同じ《pati》が省略されたものと考えられる。したがって、③も、上記の例に漏れない。

また、⑨に注目してみよう。その結構は、不定詞の対格主語、定動詞の補語、定動詞（受動相）、副詞、《interdum》、不定詞の目的語、不定詞（他動詞）の順となっている。これは、われわれが問題にしている④の結構である。定動詞、《interdum》、不定詞の対格主語、不定詞（自動詞）の順と類似している。というのも、余分な枝葉を切り落とせば、両文とも、定動詞、《interdum》、不定詞という結構だからである。ただ、⑨は、定動詞と《interdum》との間に、副詞《adhuc》が挟まっているため、当の《interdum》の修飾する動詞（不定詞）が《sentire》であることが、④の場合とは異なりはつきりとしている。つまり、「時々痛みを感じること」と（interdum dolorem sentire）になる。

さらに、以下に引用する⑦の構文に着目しよう。

「この上なく明証的に知得すると私が思う事柄において、私は時々誤るように（「ut interdum in his fallar quae me puto quam evidentissime percipere,」）（VII-70）」

この構文は、⑨とは別の意味で、すなわち、内容上④と類似している。つまり、単語や行為の主体こそ違うが、「誰某が、自分では十分に知っていると誤っている事柄においてさえ、時々間違える（誤る）」という点においては同じである。したがって、デカルトの文体上、「時々間違える」という読み方には無理がない。

結論を出そう。《interdum》は、すべてその後ろに位置する動詞（不定詞を含む）を修飾している。したがって、デカルトの文体上、リュイヌ公がそうしたように、《judicio interdum》とは読めないのである。また、余計な語句を削り落とせば、④は⑨の結構と類似していることから、④の《interdum》が修飾している語句を《alios errare》と看做すことの方が自然である、と考えられる。さらに、④は⑦の内容とも類似しているので、「時々間違える（誤る）」は、デカルトにとって普通の表現であることが分か

る。以上のことから、《interdum》は、《alios errare》を修飾していると看做さなければならない。

第二に、「時々間違える」を採る根拠として、小論の冒頭（Ⅰ節）で指摘した「常に誤る」と「時々誤る」が対句を成している点を挙げよう。この対句的な表現（小論のⅢ節で扱う）は、われわれが問題にしている箇所（以下、原文①と略記）の直後に位置するものであるが、もちろん、同じ構文ではない。しかし、われわれは、デカルトが、原文①を挿入することによって、対句的表現がある箇所（以下、原文②と略記）を持ち出すための伏線を敷いていると看做したい。すなわち、デカルトの行論には技巧的な意図があったのである。

再び原文①を掲げて、検討してみよう。尚、ここで私試みる。

原文①

「それどころかまた、私には、他の人々が、自分では完璧に知っていると思ひ込んでいる事柄において、時々、は間違える、と判断することがあるが、それと同じよう

に、他ならぬ私が、2に3を加えるたびごとに、あるいは、四角形の辺を数えるたびごとに、あるいは、もっと容易な別の事柄が思い浮かべられ得るならば、それをなすたびごとに、誤るのではないか (Imo etiam, quem-admodum iudico *interdum* alios errare circa ea quæ se perfectissime scire arbitrantur, ita ego ut fallar quoties duo & tria simul addo, vel numero quadrati latera, vel si quid aliud facilius fingi potest?) (VII-21)』

われわれが最初に注目したい言葉は《quotes》である。この言葉は、われわれの考えでは、原文②の《semper》に相当する。また、問題の《interdum alios errare》に関しては、原文②の《interdum fallar》が相当する。原文①が原文②の伏線を成す所以である。ここで、比較を容易にするために、原文②を引用しよう。

原文②

「しかし、おそらくは、私がするように騙されることを、神はお望みにはならなかった。というのも、神は」の上

なく善きものと言われるからである。ところが、もし、常に誤るように、そのように私をお創りになったというようなことが、神の善性に抵触するとすれば、私が時々は誤ることを神がお許しになっていることもまた、神の善性とは相容れないと思われる。しかしながら、そうとは言われ得ないのである (At forte noluit Deus ita me decipi, dicitur enim summe bonus; sed si hoc ejus bonitati repugnaret, talem me creasse ut semper fallar, ab eadem etiam videretur esse alienum permittere ut interdum fallar; quod ultimum tamen non potest dici.) (ibid.)』

ここで再び、原文①と原文②の対応関係を示そう。これは、文章の形式の上からの検討である。原文①の《interdum alios errare》は、原文②の《interdum fallar》に相当し、原文①の《fallar quotes》は、原文②の《semper fallar》に相当する、というのがわれわれの見方である。ふたつの原文を並べてみよう。

原文① 《interdum alios errare》《fallar quotes》

原文② 《interdum fallar》《semper fallar》

一瞥して分かるように、それぞれが相当すると看做すことのできる根拠として、一語ずつは同一単語が遣われていることが挙げられる。また、それぞれが微妙に異なる部分は、「他の人々が間違える」が「私が誤る」に変わっており、「たびごとに」が「常に」に変わっている。しかし、言葉としては似ている。すなわち、形式の上では、ほぼ同一の表現と断定できる。念のために、異なる部分を吟味してみよう。

まず、《alios errare》と《fallar》であるが、単語は異なるが意味は通底するだろう。但し、前者は、他者の行為を端から見ているので能動相を用い（他者の間違いだから、よく分かる）、後者は自分の行為なので受動相を用いている（自分の誤りにはなかなか気付かない）。つまり、自分は「誤る」のではなく、「誤らせられている」というわけである。また、「誤っている」という自覚が芽生えた時点で、おそらく「誤り」は解消へと向かうだろう。

次に、《quotes》と《semper》であるが、これも単語は

異なるが同じ事態を指している。前者は、「何ごとかがあればそのたびごとに」という意味であるから、一回一回が強調されてはいるが、つまるところ、そのまま「常に」と置き換えても不都合は生じないだろう。

今度は、内容上の検討を行おう。次節（Ⅲ節）で詳論するが、デカルトが本当に提出したい主張は、原文②である。しかし、原文②をいきなり出したのでは強烈すぎるし、あまりに図式的で、折角の想定も平板な感じを与えてしまう。それを避けるためには、似たような構文を配することによって、本当に提出したい主張を徐々に読者に慣れさせることが有効だったのである。すなわち、緩急自在の行論を狙っていたと言えよう。「他者」から「自分」、「たびごとに」から「常に」というように、比較的受け容れ易い言葉から入って、急転直下、もつとも提示したい言葉を引き出しているのである。尚、この流れは、意識的に、無意識にか、その構造が樺掛けになっている。すなわち、《interdum alios errare》の方は、副詞は同じだが動詞とその行為の主体を入れ替えており、《fallar quotes》の方は、動詞とその行為の主体は同じだが副詞を入れ替えている。

「似ているが異なり、異なるが似ている」様子を実に巧みに表現していると言えるだろう。もし、デカルトがこの箇所で意識的に迷彩を施したのだとすれば、リュイヌ公が《interdum》を《judico》に掛けて読んだのも、宜なるかなである。

以上のことから、原文①は、原文②の伏線として張られたものであり、したがって、《interdum》は、《judico》ではなく、《alios errare》を修飾している、と考えたい。

(c) デカルトの意図

さて、《interdum》の位置を《judico》の前でもなく、《alios》と《errare》の間にでもなく、まさに《judico》と《alios errare》の間に入れたのもデカルトの意図が働いていたのではないか。近代語ほど語順が問題にはならないラテン語にあって、このような穿鑿は無意味であるかも知れない。しかし、デカルトは、古典期のラテン語を用いているわけではない。彼独自の文体があつてしかるべき筈である。つまり、《interdum》が修飾する動詞を曖昧にしてお

き、原文②の伏線であることを隠したのである。もし、そう解釈することができるとすれば、ますますデカルトの技巧的意図が透けて見えてくる。つまり、原文②の過激さを和らげるために、《interdum》と《quotes》を予め読者の目に触れさせておき、しかも、《interdum》を《judico》に結びつけても読めるように、その位置を工夫したのである。あるいは、少なくとも、デカルトの意識のどこかに、そのような意図が隠れていたのではないか。もちろん、このような解釈は、勇み足どころか、無謀な逸脱と呼ぶ他ないものかも知れない。しかしながら、デカルトの誇張的懷疑の周到さに思いつくとき、われわれは、デカルト的行論の仕掛けの妙に深く食い入りたい衝動に駆られるのである。

「翻訳者は裏切り者」という言い古された格言があるが、リュイヌ公の仏訳が齎した誤読(校閲の際これを見逃しているデカルトにも責任がある)も、三百五十年を経て、訂正される方向に進むことを期待しよう。

Ⅲ 「常に誤る」と「時々誤る」

(a) 「常に」という言葉の特異性

前節で、われわれは、原文①の《*quietum*》が修飾している動詞は、リュイヌ公による従来訳の《*quiesco*》ではなく、ベサード訳や岡独訳の《*callos errare*》であることを確認したが、本節では、原文②の対句的表現である「常に誤る」と「時々誤る」とを、いくつかの観点から比較検討してみたい。手始めに、本項では「常に」という言葉の特異性に注目してみるが、その前に、一般的考察を行っておこう。

さて、天気予報における馴染みの言葉に「晴れ時々曇り」がある。気象庁が定める科学的規定はともかくとして、この言葉からわれわれが受け取る情報は、「今日一日、ときには曇るかも知れないが、おおむね晴れている」ということに尽きるだろう。つまり、ある日の天候において二つ以上の状態（たとえば、晴れと曇り）が予想される場合、その度合いの少ない方を「時々」という言葉で区別し

ているのである。したがって、一日中曇りがちではあるが、ときおりは晴れ間も顔を出すような日は、「曇り時々晴れ」となる。これに対して、「常に雨」のような言葉は用いられない。なぜか。たとえ一日中雨が降ることが予想されるとしても、ただ「雨」と表示するだけで済むからである。言うまでもないことだが、天候状態が一つのとき（たとえば、雨）は、「時々」のような区別のための言葉は必要ではないからである。

このように、「時々」という言葉は、ある現象なり、行為なりが、通常とはやや異なる仕方で見え現れた際に用いられることが分かる。しかも、その現れが数回に及ぶということも含意されている。なぜなら、もしそれが一回に限られているとすれば、「晴れ一時曇り」というような別の表現形式があるからである。また、その頻度に関してはかなり個人の恣意に委ねられており、さらに付け加えれば、その刻限を確定できないということもその特徴の一つであろう。総じて言えば、「時々」とは、珍しくはないが、さほど見受けられない現象や行為の不定期な立ち現れに関する、時の副詞である、ということになるだろう。

これに対して、「常に」という言葉は、ある現象なり、行為なりが、例外なく立ち現れているということの意味する。もつとも、日常言語は緩やかであるから、完全に例外を排除するわけではない。「ほとんど常に」の意味で「常に」が遣われることもある。また、たとえば「銀閣寺は常に京都にある」というような表現が奇妙に感じられるのは、このような場合、「常に」を省略するのが普通だからである。敢えて遣えば、強調などの別の意味を付与することになるだろう。「常に雨」という気象用語がないことが、このことを如実に語っている。総じて言えば、「常に」とは、ある現象や行為が持続していることを意味するが、特に強調する必要がないときは省略することのできる、時の副詞である、ということになるだろう。以上のことを踏まえた上で、デカルトの「常に誤る」を考察してみよう。

さて、デカルトの「常に誤る」という文言が、奇妙な想定であったことを思い出してみよう〔I節〕。「常に誤る」という事態が、まるであり得ないような想定から生み出されたものならば、もっと目立つに違いない。しかし、「常に」も「誤る」も、それぞれきわめて普通の言葉である。

したがって、これらの言葉が並んでいても、それほど奇異な感じを与えない。ところが、よく考えてみると、「常に」と「誤る」とは、それらが組み合わせられて連語を成すとき、その語句が意味する事態はかなり奇妙なものだということに気付く。われわれは、その理由を、「常に」という言葉の特異性に求めたい。したがって、先ず、デカルトが『省察』本文で用いている《sempet》を分析してみることしよう。

用例は全部で二十六例を数えるが、それぞれが修飾する動詞は多様である。それらの《sempet》は一般的法則や経験則や強調などを表現するために用いられているが、当面の課題からは離れるので、逐一用例を検討することは省く。

さて、これら二十六例のうち、他の条件を問わずに「常に」と組み合わせると奇妙な意味を帯びると看做すことのできる用例は数例である。さらに、そのうちの四例は、われわれが問題にしている《allo》の変化型であり（VII. 21.21.25.80）、いずれも奇妙な感じを与えずにはおかない。しかし、残りの例は、譲歩であつたり、否定であつたりし

て、奇妙さを感じさせることはほとんどない。たとえば、「私は常に眠る (semper dormiam) (VI-28-29)」という用例がある。そのままでは奇妙であるが、譲歩文であるためにその奇妙さは減殺されている。また、「実生活の必要は、厳密な吟味を行うための時間を常には与えない (non semper concedit) (VII-90)」という用例があるが、否定文であるために、やはり奇妙さを感じられないのである。さらに、残りの一つは、「もし私が、何が真で、何が善かを、常に明らかに見るとすれば (si semper quid verum & bonum sit clare viderem) (VII-58)」という想定を行っている用例であるが、そんなことはあり得ないことを暗に含んでいる文なので、これも問題にはならない。したがって、「常に誤る」以外は、一見して奇妙には見えないのである。ただ、これらに共通していることは、普通はあり得ないと考えられている事柄の想定として用いられている、という点である。但し、そのような想定でも、それが譲歩であったり、否定されていたりすれば、奇異な感じを受けることはあまりない。つまり、肯定的な想定文でなければ、取り立てて奇妙であるとは言えないのである。

したがって、次のように言うことができるだろう。「常に」という副詞は、自然法則（地球は常に自転する）、経験則（夕焼けの翌日は常に晴れる）、強調（パウロは常に神を信じる）、習慣（私は就寝前には常に歯を磨く）などに遣われた場合は普通の表現であるが、改めて「常に」を付け加える必要のない事柄（銀閣寺は常に京都にある）や、類と種の間を概念的に規定する文（人間は常に動物の一種である）の場合は省略されるし、極端な想定（私は常に眠る）は、それが肯定的な場合には奇妙な様相を呈する、と。

デカルトは、「常に誤る」という、奇妙な肯定の想定文を提示した。しかも、奇妙でありながら、尚、読者には、一笑に付すことのできない内容をもっているように見えるのである。それこそ、奇妙な事態ではないか。

(b) 「時々誤る」から「常に誤る」へ

さて、前項では、「常に」の特異性を考察したが、本項では、「過誤」を巡る動詞の検討から始め、それを承けて、

「常に誤る」が「時々誤る」から導出される過程を論じた
い。

われわれはこれまで、《erro》に「間違える」、《fallor》
に「誤る」という訳語を配してきたが、デカルトによるこ
れらの用語例の検討から論を起こしてみよう。尚、
《fallor》に関しては、その能動相の《fallo》も「欺く」と
いう訳語を与え、その対象とする。さらに、『省察』本文
には、《decipio》という言葉の使用が五例あるが、《fallo》
とさほど本質的な相違はないので、その検討は割愛する。
但し、原文②に現れる《decipio》は見過ごせない要素を秘
めているので、後で少し触れる。

デカルト哲学を誤謬論の観点から論じた研究者がいる
ほど、デカルトにはたしかに誤謬に纏わる話題に事欠かな
い。したがって、『省察』に現れる「間違える(erro)」と
「欺く(fallo)」(その受動相も含む)も、それぞれ、十六
例、三十九例と、かなりの数にのぼる。もちろん、そのす
べてを詳細に検討する余裕はないので、重要点を一つだけ
挙げて、それを吟味してみよう。

それは、《erro》が能動相でしか違われのないのに対して、

《fallo》には能動相とともに受動相の使用例がある、とい
うことである。その特徴を洗ってみると、《erro》が「誰
某が間違える」という事態を単に描写するだけであるのに
対して、《fallo》は、「私が誤る(欺かれる)」という観点
(受動)と、「悪霊などが私を欺く」という観点(能動)と
を提供していることが分かる。実は、《erro》と《fallo》の
この特徴の相違は、非常に重要な意味を帯びているのであ
る。

もう一度、原文①と原文②を思い出してみよう(Ⅱ節)。
われわれの解釈では、原文①の《interdum alios errare》
は、原文②の《interdum fallar》に相当した。相違は、行
為の主体と、過誤に関する動詞にある。この相違は、原文①
の《fallar quotes》にすでにそっくり現れている。すなわ
ち、同じ《erro》を用いるならば、《erran quotes》となる
ところを、わざわざ単語を変えているのである。もちろ
ん、自分の行為だから、というように考えることもできる
し(Ⅱ節)、あるいは、単に言葉を入れ替えただけでそれ
以上の意味はない、というように読むこともできるだろ
う。しかし、むしろわれわれが注目したいのは、上で触れ

たように、*Calio*には能動と受動の両側面があるということである。つまり「私」に関しては、単に「間違える」ではなくて、「欺く」という背景をもった「誤る（欺かれる）」が違われなければならないのである。すなわち、ここにおいて、デカルトはすでに原文②を引き出すための準備をしているのである。

ここで、原文①から原文②にかけての、デカルトの論理構造を概観してみよう。

原文①

(イ) 他の人々が、自分では完璧に知っていると思い込んでいる事柄において、時々間違える、と私は判断することがある。

(ロ) それと同じように、他ならぬ私が、ゝのたびごとに、誤るのではないか。

原文②

(ハ) しかし、おそらくは、私がそのように騙されることを、神はお望みにはならなかった。

(二) というのも、神はこの上なく善きものと、言われるからである。

(ホ) ところが、もし、常に誤るように、そのように私をお創りになったというようなことが、神の善性に抵触するとすれば、

(ヘ) 私が時々誤ることを神がお許しになっていることもまた、神の善性とは相容れないと思われる。

(ト) しかしながら、そうとは言われ得ないのである。

(イ) から考察してみよう。これは省察者の経験であって、われわれも似たような経験をもつような気がするゆえに、直ぐに首肯できる。ただ、「自分では完璧に知っている」と思い込んでいる事柄」というのがやや曲者である。ここで言われている事柄の実相が窺い知れないからである。単なる日常的な思い違いや誤解のことを指しているのか、それとも、何か学問的な事柄に関することなのか、あるいは計算間違いなどの不注意のことを意味しているのか。おそらく、どれかに確定できることではない。むしろ、デカルトは、その点をわざとぼかしたのではないか。デカルト

がここで言いたいことは、「確實であると看做している事柄でも、もしかしたら間違えているのかも知れない」ということに尽きる。したがって、(イ) から (ロ) が引き出されることになる。ここで、「確實であると看做している事柄」の具体例が示される。すなわち、「2に3を足せば5になる」などである。

しかし、よく考えると、(イ) から (ロ) を引き出すとき、デカルトは巧妙に立ち回っていることが分かる。というのも、他者の間違いにこのような具体例を持ち出せば、たちまち妙なことになるからである。すなわち、「自分では完璧に知っていると思いついてる事柄」の代わりに、(ロ) のような具体例を持ち出すことができなかったのである。言うまでもないことだが、「2に3を足せば5になる」ような事柄において、他者が時々間違えるのを見て取る経験など、われわれにあることではない。もちろん、ある研究者が言うように、計算間違いのような些細な事柄は別であるが、ここでの懷疑は、数学全体の真理性に關してのことであって、運用の際の過誤のことではないから、(イ) と (ロ) の「間違える(誤る)」対象が同じだとすれ

ば、それは当たらないことになる。^(二五)しかし、デカルトの記述が曖昧であることは否めない。それでも尚、われわれは、この曖昧さを、彼のよい意味での巧妙さと看做したい。

次に、(ハ) と (ニ) を検討してみよう。(ハ) では、「私は騙される (me decipi)」という言葉が使用されている。ここにも、技巧がある。つまり、《tallo》が受動相を取って、自動詞的な「誤る」という意味をもつことは可能であるが、《decipio》にはそのような用法はないからである。したがって、ここでの意味はより欺瞞の度合いが強くなり、それとともに、神の善性を持ち出して、それとの不適合を強調しているのである。すなわち、「神が騙すことなどあり得ないではないか」というわけである。但し、これはデカルトの言い分ではない。古い意見を對抗させているのである。

さて、前節 (b) で述べたように、(ホ)、(ヘ)、(ト) がデカルトのもつとも言いたいことである。(ホ) は (ロ)、(ハ)、(ニ) を纏めて、(ロ) のような想定矛盾を突いた文言である。言外に、「私が常に誤るなど、神の善

性に反するではないか」という意味を込めている。しかし、ここで、転じて、同じような事態である（へ）を持ち出して、「これもおかしいではないか」と畳み掛けている。つまり、「時々誤る」という経験的な事態をどう説明するのか、これだって「神の善性に反するじゃないか」と読者に迫っているのである。しかし、「時々誤る」のは人の常なのだから、これは神の善性として両立しなければならぬ。だとすれば、やはり「常に誤る」ことだってあり得ないことではない、と一気呵成に（ト）を結論する。

簡単に纏めてみよう。原文①は、いわば肯定の道で、「他者が時々間違える」から「私は常に誤る」を強引に引き出している。他者の間違いの具体的内容はばかしてあったが、それはデカルトの技巧である。また、原文②は、いわば否定の否定の道（結局、肯定になる）で、「常に誤る」が神の善性に抵触してそうは言えないのなら、「時々誤る」も同然であろう（第一の否定）。しかし、経験を考慮に入ればそれも言えないではないか（第二の否定）。したがって、「常に誤る」こともあり得ることなのである（肯定）。すなわち、このような流れから極端な想定が提出さ

れ、その想定によって、すべてが疑われたのである。そして、われわれはこの流れに、原文①と原文②の伏線関係を読み取りたい（Ⅱ節）。少しずつ読者を手懐けてゆくデカルトの手が見えるようではないか。しかし、この疑いは、あくまでデカルトの本意ではない。すべての知識を一旦括弧に入れるための方策なのである。したがって、多くの解釈者が指摘するように、デカルトの懷疑は「意志的」なものと言えるだろう。

さらに、*Interdum fallar* は、*Semper fallar* を引き出すための修辭的な道具の役割を果たしている、ということも付け加えておこう。というのも、前者は日常的（経験的）であるのに対して、後者は非日常的（想定的）だからである。つまり、「時々」と「誤る」は簡単に結びつくが、「常に」と「誤る」は極端な想定をなさない限り、本来適合しない筈である。しかし、一見して「常に」と「時々」は対を成すように見える。このことを利用して、「常に誤る」が非日常的な事態であることを隠すのである。言い換えれば、日常的な対を用いて、一方の非日常性を目立たなくさせているのである。

ところで、後者の不適合が見過ごされやすいもう一つの理由を挙げれば、『省察』の読者がデカルトの想定に直ぐに慣れてしまつて、奇抜な想定をしたのに大して驚かなくなっているからではないだろうか。あるいは、そのような想定をばかばかしいものと看做して、それ以上考察してみないからではないか。「時々」と「常に」は対を成す言葉なので、組合せとして奇異な感じを抱かせない。したがつて、奇異な想定も、直ぐに慣れるというわけである。そのため、その想定の中身を十分に吟味してみないことになる。たとえば、網渡りは大変難しい芸だそうであるが、見慣れればあまり感興が湧かない。それと同じことが、読者の心理を支配してしまうのではないだろうか。しかし、これは読者に責を負わせるべき事柄ではないだろう。デカルトの技巧の冴えが、それを生んでいる、というのが小論の立場だからである。

デカルトは「透明な真理 (perspicuae veritates) (Ⅱ-20)」である数学的真理を疑つてはいない。それを敢えて疑つたのには、もちろん理由がある。懐疑論者が持ち出すであろうどのような懐疑をも打ち破るために、考えられる懐疑の

中で最強の懐疑を提出し、その懐疑をも乗り越える道を開拓したからである。これは、相手のもつとも強力な武器を自ら用いて、その武器の鈍いことを明らかにする方法なのである。おそらく、デカルトにとって、欺く神に続いて登場する悪霊は、懐疑論者たちが用い得る最強の武器だったのだろう。しかし、『省察』の流れの中で、理性が適切に使用される限り、そのような悪霊は幻影であることが分かつてくるのである。すなわち、理性は自らを正当化していくのである。

しかしながら、それは遠く『省察』の終わりに至らなければ達成されることではない。デカルトは数学の真理性が無効になる可能性を示唆した。かくて、すべては疑わしい。この苦境から、デカルトはどう脱出するのか。それについては次節〔Ⅳ節〕に譲るが、その前に、デカルトの行論の魅力について一言触れておこう。

(c) デカルト的行論の魅力

どんなに見事な料理でも、それを盛る器が貧相では、

せっかくの料理が台無しになる。『省察』が古典としての命脈を保っているのも、単に思想の中身だけに頼っているからではないだろう。したがって、デカルトの思想（料理）もさることながら、その表現（器）の優れている点にも着目しなければならない。もちろん、器負けするような料理ならば、デカルトはただの小器用な文章家になってしまふ。すなわち、思想と表現が渾然一体となって『省察』の魅力を生んでいるのである。

デカルトの『省察』にはさまざまな意匠が凝らされており、読者は知らず識らずのうちに、そのからくりで圧倒させられる。上で論じた、「時々誤る」から「常に誤る」への展開もその一つであるが、これはもう芸のなせる業と呼べるほどである。上手な柔道家と乱取りをする場合、自由自在にこちらのバランスが崩されてゆき、やがては相手のペースにはまって、気付いたときには、気持よく畳の上に叩きつけられている……。デカルトの行論からは、それと同じような快感を受け取ることができる。もちろん、鵜の目鷹の目でこれに当たれば、さまざまな綻びが見出されることだろう。しかしながら、そのような読み方には限界が

ある。たいていの場合、あら探しは、「労多くして益少なし」と言えるからである。

そもそも、何らかのかたちで『省察』を研究している者が、その動機を静かに反省してみるとすれば、この著作に純粋な興味を抱いたことが一番に挙げられるのではないだろうか。誰かに強制されて読まれたのだとすれば、それほど面白くは読めないだろう。論者も、『省察』を初めて読んだとき、「神」の登場に面喰い、やがて強い反発を感じたものだった。しかし、それは人から勧められて読んだときのことであって、自ら進んで読もうと企てたときには、すでにそのような反発は消えていた。むしろ、自分の考えが至らない箇所こそ、強い興味が湧くようになったのである。理解へ至る道は遠いが、そのような隔たりへの絶望を振り払うだけの魅力が、この著作にはある。

しかしながら、われわれには、もっと楽しくデカルトに近づく道があるのではないだろうか。そして、デカルトとともに、さまざまな問題を思索する喜びを見出すことができるのではないだろうか。もちろん、それは、『省察』をデカルトの意図などお構いなしに読むことではない。「読

者へのまえおき」(VII-10)を一読すれば、それは明らかであろう。しかし、あらゆる読み方を検討してみることも、あながち不埒なふるまいとは言えまい。それが真の理解への道を照らすためのものならば……。けだし、『省察』を正確に理解することと、その表現を堪能することは、たしかに両立するのである。

IV 底知れぬ渦の中で

前節では、「常に誤る」と「時々誤る」との相違を検討し、「常に誤る」が、極端な懷疑を捻出するための巧みな想定であったことを見たが、本節では、その想定の結果、必然的に陥らざるを得なかった「底知れぬ渦の中」という比喩の意義を考えてみたい。

デカルトは、初日の省察を終えて二日目の省察に入るとき、自分の陥った場所を「底知れぬ渦の中」(*in profundum gurgitem*) (VII-24) に喩える。進退窮まった証として、「底に足を付けることも、泳いで水面に浮かび上がることもできない」(*nec possim in imo pedem figere, nec*

enatare ad summum) (*ibid.*) ほど狼狽えてしまった、と述べている。しかしながら、われわれは、この渦中こそ、デカルトがもともと行き着くことを望んでいた地点であり、狼狽えるどころか、予定通りの行論がなされていると考えたい。

手始めに、この比喩を分析してみよう。「第一省察」でデカルトが求めたのは「堅固で不易なもの」(*quid firmum & mansurum*) (VII-17) であった。しかし、初日の省察では、それを見出すことができなかった。すべてが疑わしく、もつとも堅実と思われた数学的真理も、前節(III節)で検討したように、「常に誤る」という事態を想定することによって、虚偽である可能性を示唆した。いわば、「脱出し難い暗闇の中」(*inter inextricabiles tenebras*) (VII-23) に、思わず入り込んでしまったのである。

ところで、この「暗闇」という表現は、デカルトが好んで用いるもので、『方法叙説』にも、「独りで暗闇の中を歩む人のように」(*comme un homme qui marche seul & dans les ténèbres*) (VI-16) という比喩が見受けられる。「かつて信じたあらゆる意見を捨て去る決意」(*la résolution de se*

défaire de toutes les opinions qu'on a reçues auparavant en sa création (VI-15) をした者にとって、「注意深さ」こそ必須の要件であり、「暗闇」は、まさにこの「注意深さ」を発揮するのに相応しい演出なのである。なぜなら、「暗闇」の中では、明るい場所とは異なり、「きわめてゆつくりと進み、あらゆる事柄において十分な注意深さ、(circuspection)(VI-16 - 17) を働かさなければならぬからである。したがって、認識者にとって、一見して「負の条件」とも思える「暗闇」は、かえって索められるべき舞台と化す。

この「暗闇」の譬えは、「第二省察」では「底知れぬ渦」に姿を変える。われわれは、そこに「暗闇」以上の困難を見出す。しかし、「暗闇」と同様、この「底知れぬ渦」は、省察者の是非ともくぐり抜けなければならない最大の関門なのである。両者を比較してみよう。

先ず、われわれが気付くのは、両者とも歩行が困難なこととは同じだが、前者は立ち止まることが許されるのに対して、後者はそれすらできないことである。また、後者はそれに加えて、息さえできない。これはもう、極限の

状況と言ってもよいだろう。もはや、溺れるのを徒に待つのみである。溺れば、折角の省察の歩みを放棄しなければならない。しかしながら、よく考えてみよう。デカルトは、そのような状況に、「わざと陥った」とも受け取れるのではないだろうか。デカルトに倣って、譬えを用いてみよう。

場慣れた奇術師は、自分の腕前を示すために、これから行おうとする奇術の困難さを観客の面前でさりげなく強調するが、その難易度が高く見えれば見えるほど、奇術が成功した暁には鮮やかな印象を与えずにはおかない。それと同じように、デカルトも、もはや省察を断念しなければならぬ最高の山場を拵えて、自らその難局を乗り越えてみたのではないか。これは至難の業であつただろう。

さらに注目すべきは、「底 (imum)」と「水面 (sumum)」という表現である。両語を主格のかたちで並べ、見比べてみると、あたかも韻を踏んでいるかのような趣があるが、一体何を象徴しているのだろうか。もとより、デカルトは比喩の巧みな書き手である。したがって、筆任せに捻り出した譬えとは考え難い。必ずや、何らかの効果を狙つて

いる筈である。さつそく、解釈を試みてみよう。

最初に指摘すべきことは、両者には、天と地の開きがある、ということである。「底」に足が付けば、とりあえずは身体の抛り所を得るだろう。しかし、息ができないことには変わりがないのである。すなわち、省察以前のまどろみの中に逆戻りしてしまう。そこでは、真なるものを呼吸することはできず、欺かれたまま、偽の呼吸をしなければならぬのである。これに対して、「水面」に顔を出せば、立ち泳ぎを続けなければならないとしても、とりあえずは新鮮な空気を吸うことができる。真なるものの認識という空気である。したがって、次のように言おう。

すなわち、足が付く「底」は、楽ではあるが断固として斥けたい「古い意見 (veteres opiniones) (VII-23)」の象徴であり、「水面」は、この後、達することのできた「我在り、我存在す (Ego sum, ego existo.) (VII-25)」という哲学の第一原理を暗示しているのである、と。

《Ego sum》は、まさに溺れかけ喘ぐ者を救う、空気の役割を果たす。もちろんこの段階では、《Ego sum》は、いわば「溺れる者の藁」にすぎない。しかし、この一茎の藁

を導きの糸として、さらなる困難に立ち向かう省察者は、底に足を付けてまどろむことを拒否し、水面に顔を出して真理の大海に泳ぎ出ようと企てるのである。

デカルトは、底に沈むことなく水面に顔を出した。その見事さには眼を瞠るものがある。奇術には種や仕掛けがあるが、デカルトの見せた技は奇術ではない。しかし、その叙述の行程は自然の流れに身を委ねたものでもない。それどころか、優れた行論を読者に味読させるために、したたかに計算され尽くした演出を行っているのである。もつとも、その演出は、単なる作りものでもない。それがいつかは確定できないが、実際にデカルトが「省察」を行ったとき、自らの哲学の第一原理を発見する試行錯誤の過程で、少なからず呻吟したに違いないからである。もちろん、「省察」執筆時には、それは過去の記憶の中の出来事になつていたのであるが、その記憶を追体験として描写する際、最大の効果を狙わない筈がない。われわれが「省察」から受ける尋常ならざる臨場感はその虚構から生まれるものではけつしてなく、深い体験に根差しているのである^(三)。もつとも、実際になされた「省察」と「省察」草稿と

の間には、どのくらいの時間の間隙があるのかは推定さえできない。あるいは、考えながら書き、書きながら考えていたのかも知れない。ともあれ、『省察』の成立事情を考慮すれば、完成までに紆余曲折があったことは間違いないだろう。というのも、デカルトは、ホラティウスの箴言である「書き留めしなばそれは秘めて九年間温めんことを〔22〕」を実践した可能性が高いからである。すなわち、デカルトの『省察』は短時日で成ったものではけっしてないのである。

そのような成熟と丹精が結んだ果実の一滴とも言える、『底知れぬ渦の中』で喘ぐ姿と、『Ego sum』を得た後の自信に満ちた表情との間に生まれる鮮やかな「対照」こそ、デカルトが目論んだ演出なのである。もちろん、デカルトにとって、『底知れぬ渦の中』は前門の虎にすぎない。後門の狼は、この後に群をなして控えているのである。

以上のことから、われわれは、こう結論付けたい。「常に誤る」という奇妙な想定を設えてまでそこへ至ることに固執した、この「底知れぬ渦の中」こそ、デカルトがもともと行き着くことを望んでいた地点であり、狼狽えるど

ろか、予定通りの行論がなされたのである、と。

註

(丁)

(一) デカルトからの引用は、*ŒUVRES DE DESCARTES, publiées par Ch. Adam & P. Tannery, nouvelle présentation, 11 vols., Vin, 1973-1978* による。尚、原則として、本文中にその巻数をローマ数字によって、その頁数をアラビア数字によって記す。また、必要に応じてその表記を改めた箇所や、引用原文をイタリックにした箇所がある。さらに、イタリック体の訳にはすべて傍点を施した。

(二) 「幽霊の正体見たり枯尾花」は人口に膾炙した俳句であるが、もともとは「化物の生体見たり枯をばな」であった由。尾州の人横井也有の句。すなわち、彼が松木淡々という俳人を評した句。淡々がおのれを高ぶり、人を慢ると伝へ聞か、初めて対面して「句作したもの。正体が分かれば、畏怖もしくは侮蔑の対象であったものも何でもなくなるというわけである（『俳家奇人談・続俳家奇人談』、竹内玄玄一著、雲英末雄校注、岩波文庫、一九九四年（第三刷）、一七三頁）。尚、句そのものは目の錯覚を詠んだものかと思わせるが、題材を知れば伝聞と実際との相違が主題であったことが分かる。これは、デカルトがそれまで真理と認めてきたものの受け取り先を、「感覚から（a sensibus）」（主に視覚）と「感覚を介して（per sensus）」（主に聴覚）との二つに区別した「第一省察」の記述（VII-18）ときれいに対応している。「ピエールマンとの対話」（V-146）参照。

(三) Adrien Baillet, *La Vie de Monsieur Des-Cartes*, 2nd partie,

Georg Olms Verlag, 1972, p. 172. 『デカルト伝』、アドリアン・バ
イエ著、井沢義雄・井上庄七訳、講談社、一九七九年、一九一
頁、参照。

(四) アルキエは「リュイヌ公の翻訳が「真正のデカルトのテク
スト」に通用する」と記している。v. *Descartes Œuvres
philosophiques*, textes établis, présentés et annotés par Ferdinand
Alquié, t. II, Garnier, 1967, p. 379.

(五) *DESCARTES Méditations métaphysiques / MÉDITATIONS
DE PRIMA PHILOSOPHIA*, texte latin et traduction du duc de
Luyne, *MÉDITATIONS DE PHILOSOPHIE PREMIÈRE*,
présentation et traduction de Michelle Bessade, LE LIVRE DE
POCHE, Classiques de la philosophie, Librairie Générale Française,
1990.

(六) *ibid.*, p. 5.

(七) *ibid.*, p. 39 et 41.

(八) *RENE DESCARTES MÉDITATIONEN über die Grundlagen
der Philosophie mit den sämtlichen Einwürden und Erweiterungen*,
zum erstenmal vollständig übersetzt und herausgegeben von Artur
Buchanan, Verlag von Felix Meiner, 1972 (der ersten deutschen
Gesamtausgabe von 1915), S. 14.

(九) *DESCARTES MÉDITATIONEN über die Grundlagen der
Philosophie*, auf Grund der Ausgaben von Artur Buchanan neu her-
ausgegeben von Luder Gåbe, Felix Meiner Verlag, 1959, S. 37.

(一〇) *The Philosophical Works of Descartes*, vol. I, rendered into
English by E. S. Haldane and G. R. T. Ross, Cambridge University
Press, 1981 (first published 1911), p. 147.

(一一) *The Philosophical Writings of Descartes*, vol. II, translat-
ed by John Cottingham, R. Stoothoff, D. Murdoch,

Cambridge University Press, 1990 (first published 1984), p. 14.

(一二) *Descartes Selected Philosophical Writings*, translated by
John Cottingham, R. Stoothoff, D. Murdoch, Cambridge Univer-
sity Press, 1988, p. 78.

(一三) *René Descartes Meditationes de prima Philosophia /
Meditations on First Philosophy*, A Bilingual Edition, intro-
duced, edited, translated and indexed by George Heffernan, Uni-
versity of Notre Dame Press, 1990, p. 93.

(一四) 『省察』、デカルト著、三木清訳、創元社（哲学叢書）、
一九五〇年、四三頁。尚、この訳書では正字が用いられて
いるが、適宜新字体に改めた。

(一五) 『デカルト』、野田又夫編、中央公論社（世界の名著）
二二、一九六七年、所収「省察」、井上庄七・森啓訳、二四一頁。
(一六) 『デカルト』、務台理作他編、河出書房新社（世界の大事
想）七、一九六九年、所収「省察」、梶田啓三郎訳、一四五頁。

(一七) 『デカルト著作集』、白水社、一九七三年、所収「省
察」、所雄章訳、三三三頁。尚、『増補版デカルト著作集』（一
九九三年）に異同はない。

(一八) 『デカルト／方法叙説／省察』、白水社（イデー選書）、
一九九一年、所収「省察」、所雄章訳、一一〇頁。

(一九) Concorde to Descartes' *Méditationes de Prima Philo-
sophia*. Prepared by Katsuzo Murakami, Meguru Sasaki and
Tetsuichi Nisimura, Preface by Takefumi Tokoro, Olms-Weidmann,
1995, p. 139.

(二〇) *ibid.*, p. 268.

(二一) *ibid.*, p. 58.

(二二) 『デカルトの誤謬論』、池辺義教著、行路社、一九八
八年、参照。尚、この著作は「デカルト哲学全体を誤謬論の展開

と捉え、「方法的誤謬論」「形而上学的誤謬論」「人間の生の誤謬論」の三つの観点から論じたものである。

(1111) cf. *Concordance to Descartes' Meditations de Prima Philosophia*, p.89 and pp.103-104.

(1114) v. Harry G. Frankfurt, *Démon, Rêveurs et Fous*, traduction de Sylvain M. Laquet Presses Universitaires de France, 1989, p.105.

(1115) 『デカルト「省察」の研究』山田弘明著、創文社、一九九四年、二三頁。

(1116) この箇所については、解釈が分かれている。以下、参照。
(1) 昭和六十年科学研究所費補助金(総合研究A)「デカルト「省察」の(共同作業による)批判的註解とその基本的諸テーマの問題論的研究」(研究代表者 所雄章、二六-二七頁)。

(2) 「デカルト形而上学の成立」、村上勝三著、勁草書房、一九九〇年、一五三頁。

両者は「quod ultimum」をどう読むかによって、別の道を行んでいる。(1)は(へ)だけを指示しているというのに対して、(2)は(ホ)と(へ)を併せて指示していると解している。また(1)が(ホ)を仮定文と読んでいるのに対して、(2)はそれを譲歩文と看做している。リュエヌ公の翻訳によれば「(permette)」という動詞を反復させているところから、明らかに(へ)だけを指しているように読める。また、ベサード訳でも「(ultime consequence)」と訳しているの、やはり(へ)だけを指しているように読める。しかし、それだけでは(1)を支持することはできないが、煩瑣になるので、これ以上の詳細は省き、われわれとしては、(1)を採用したい。たしかに、(2)の解釈は斬新ではあるが、われわれとしては、デカルトのこの箇所での意図は、あくまで極端な想定によって「常に誤る」という可能性を提示することと解釈したい。したがって、それを重視しない(2)を採用することはできない。

(1117) v. Martial Gueroult, *Descartes selon l'ordre des raisons*, t.1, Aubier, 1991, p.38; Ferdinand Alquié, *Descartes l'homme et l'œuvre*, Hatier-Boivin, 1956, p.77. (『デカルトにおける人間の発見』F.アルキエ著、坂井昭宏訳、木鐸社、一九七九年、九四頁) ; Geneviève Rodis-Lewis, *L'Œuvre de Descartes*, t.1, Librairie Philosophique J. Vrin, 1971, p.218. (『デカルトの著作と体系』ジュヌヴィエーヴ・ロディス・レヴィス著、小林道夫／川添信介訳、紀伊國屋書店、一九九〇年、二二一頁)。また、山田弘明、前掲書、一五頁、池田義教、前掲書、五八頁、『デカルト哲学の体系』小林道夫著、勁草書房、一九九五年、九九頁、『デカルト研究 理性の境界と周縁』、谷川多佳子著、岩波書店、一九九五年、六九頁など、参照。これらの論考は、それぞれの観点から、デカルトのこのような懷疑を「意志的」なものとして看做している。

(1118) 尚、「欺く神と悪しき守護霊」との異同については、諸家の解釈を詳細に検討した論考があるので、この小論では論じない。所雄章、前掲報告書、四〇-四四頁、参照。また、誇張懷疑と「永遠真理創造説」との関係についての詳しい背景は、小林道夫、前掲書、一〇四-一〇八頁、参照。

(1119) Harry G. Frankfurt, "Descartes' Validation of Reason", in *American Philosophical Quarterly*, vol. II, no. 2, 1965, pp. 149-156. (『デカルトによる理性の正当化』ハリー・G・フランクフルト、拙訳、『現代デカルト論集Ⅱ 英米篇』、デカルト研究会編、勁草書房、一九九六年、所収、八一-一〇七頁)、参照。

(1120) 「省察」の様式を顧みれば、実際にはどうであれ、安息日から次の安息日までの六日間で行われたという、『創世記』を連想させる体裁をとっていることに気付く。その証拠として、『第二省察』の冒頭に「昨日の省察で (hesternā meditatione) (VII-

23)』という語句が見えるし、「第四省察」でもその語り初めに「(11)数日の間に(his diebus)(VII-52)」という言葉が出てくる。また、「第六省察」には「(11)数日に互を誇張的な懷疑(hyperbolice superiorum dierum dubitationes)(VII-89)」という記述がある。その他、「省察」において、これらに類似した表現は数例見出せる(VII-58, 59, 63, 65)。cf. Concordance to Descartes *Meditationes de Prima Philosophia*, p. 67.

(三二) ベークマンに宛てた書簡(一六一九年三月二六日付)に「その光の助けによって、どんなに分厚い暗闇も払われ得ると考えています(, ejus [= luminis] auxilio densissimas quasque tenebras discuti posse existimo.)(X-158)」という一文が見える。ともあれ、「光」認識、「暗闇」無知」という図式は一般的なものであろうが、デカルトもこの図式を好んでいた、と言えよう。『方法序説』を読むときデカルトの生と思想』、山田弘明著、世界思想社、一九九五年、四三―四八頁、参照。

(三三) そのままの言葉は『省察』には見当たらない。したがって、『方法叙説』にある(Le premier principe de la Philosophie)(VI-33)を援用する。尚、このように苦労して得られた真理でも、それがあまりに単純なので、取り出された言葉(たとえば、「コーギト・エルゴ・スム」)だけを受け取る者は、それを椰揄の対象にしたくなるようである。漱石もその『猫』の中で、デカルトの第一原理を、猿股の発明と並べてからかっている(『吾輩は猫である』、夏目漱石作、岩波文庫、一九九五年(第一一刷)、二六五頁、参照)。しかしながら、われわれは、その単純な言葉に至るまでの苦闘をこそ読み取るべきだろう。

(三三) バイエの伝えるところでは、一六二九年、デカルトはオランダに居を定めて、形而上学について九箇月にも互る省察をなし、短い論文に纏めたとの由。しかし、この論文は他の仕事

のために中絶され、その後再びデカルトがそれに着手するのは十年後のことだそうである。v. Adrien Baillet, *La Vie de Monsieur Des-Cartes*, 1^{re} partie, Georg Olms Verlag, 1972, pp. 178-181. 前掲書『デカルト伝』七七一七八頁、参照。

(三四) この点については、所雄章、前掲報告書、四七―四八頁、参照。

(三五) 池辺義教、前掲書、一七頁、参照。

(三六) v. Michelle Beyssade, *op. cit.*, p. 6.

Semper fallar et interdum fallar

— Du raisonnement cartésien —

Seiji MUTO

Descartes a employé ces expressions, *semper fallar* (je me trompe toujours) et *interdum fallar* (je me trompe quelquefois), à travers des doutes développés dans la méditation première (AT.VII-21). Il nous semble qu'elles constituent une paire. Toutefois celle-ci mise à part, quelle est la signification de celle-là? Descartes suppose comme suit: «si la bonté de Dieu devait exclure qu'il m'ait créé tel que je me trompe toujours, cette même bonté devait aussi s'opposer à ce qu'il permette que je me trompe quelquefois, ultime conséquence qu'on ne peut pourtant pas soutenir (*ibid.*).» Ce raisonnement cartésien semble une sorte de sophisme; mais nous le tenons pour indispensable.

C'est pourquoi nous voulons examiner l'état de «je me trompe toujours» et tirer son importance au clair. Nous amorçons d'abord l'examen des deux interprétations divergentes lues dans plusieurs traductions d'un passage cartésien.

Ensuite nous considérons la différence de ces deux expressions, c'est-à-dire, «je me trompe toujours» et «je me trompe quelquefois», surtout la particularité du mot «toujours».

En dernier lieu, nous montrons que «un profond trou d'eau», dans lequel était tombé Descartes malgré lui à force des doutes hyperboliques, est plutôt le point auquel il avait voulu parvenir.

Dilthey über den Begriff des objektiven Geistes

Yasuo ORIHASHI

In seinen letzten Jahren führt Dilthey den Begriff des objektiven Geistes (der Objektivation des Lebens) in seine Philosophie ein. Er versucht hier, diesen Begriff Hegels in einen für die Zeit der Erfahrungswissenschaften passenden Begriff umzugestalten. Der neue Begriff der objektiven Geistes tritt zwar aus dem Entwurf der hermeneutischen Philosophie heraus, den Dilthey in späteren Jahren versucht, steht aber auch zu seinen früheren Untersuchungen über das dichterische Schaffen (bzw. die dichterische Einbildungskraft) immer noch in einer engen Beziehung.

Dilthey beginnt damit, von früh an die weltanschauung-eröffnende Leistung des Dichters ins Auge fassend, den Vorgang des dichterischen Schaffens psychologisch zu erörtern. Später legt er auf die schöpferische Leistung des Ausdrucks als solches mehr Nachdruck, indem er die hermeneutischen Beziehungen zwischen Ausdruck und Verstehen in Betracht zieht, hält aber zugleich auch an manchen früheren Einsichten fest. Der Diltheysche Begriff des objektiven Geistes umfaßt also auch seine früheren Untersuchungen über das dichterische Schaffen. Sein sinnvoller Inhalt konnte sich erst aus diesem Gesichtspunkt erklären.